Jane Eyre に於ける月の描写

宮　川　下　枝

Jane Eyre を読む時，物語の筋，人物の性格を中心として読んでいくのは，勿論重要なことであるが，Charlotte Brontë の文章の特徴というのも興味深いものである。*Jane Eyre* の文章には技巧の美しさがあり，修辞的な工夫がこらされている。Charlotte の文章の均衡の美しさは決してぼさっとした tactless なものではない。自分の表現に対して非常に敏感で細い注意がそこに払われている。

Alliteration を用い simile を好み climax という技巧を使用し，文のバランスを常に考えるなど，いろいろと苦心の点が挙げられるが，私が特に興味を覚えるものは，物語の進展，主人公の感情に伴って変化していく自然描写，内容と背景の一致ということである。常に彼女の友であった Yorkshire の陰欝な自然，冷涼たる風の吹きすさぶ heath の丘に見た自然，そこで眺めた雲，星，そして月は常に彼女の想像力を育んだものと思われて，いつもそれが物語が高潮に達する時主人公達の背後に現れて来る。そしてその自然は決して静的なものではなく，常に動的である。心の嵐の吹きすさぶ時は外も嵐で雲が飛び散っている。嵐が治まれば主人公の心の中にもやがて平和が戻って来る。就中面白いと思ったのは，Charlotte がしばしば月のある光景を用いていることである。その月も単に一過的な観察にとどまることなく時の経過と共に細かに描写されている。月と共に一つの事件が終る。元来 Charlotte の時代といえば，電燈もなく，タクシーも自家用車もない時代で，マホガニーの調度の輝きは天井からの眩しいシャンデリヤの光からではなく，大きなろうそくに依るものであり，お客様は，二頭だて，四頭だての馬車でやって来て，その家の主人は馬にのって出かけるという風であるから，夜の戸外には輝く水銀燈がある訳でもなく，ネオン光る街角がある訳でもない。従って夜の散策には月あかりが必然的なものだったのだろうと想像出来るが，それなら同じ家に育ち同じく heath の丘を愛した Emliy Brontë の方はどうであろう。

Jane Eyre に於ける自然描写は Charlotte が Emily Brontë の *Wuthering Heights* から学んだものであろうと J. L. Davis はその *Jane Eyre* の Introduction に於いて述べているが，二人は共に神秘的な観点から自然を描き乍らも決して等しい描写をしてはいない。特に月に至っては非常に異っている。今 *Wuthring Heights* を探してみても "二人の顔が月の光にくっきりと浮びあがった" という処は一ケ所しかない。夜中の行動はないのかと云えばそうではなく，夜家を抜け出して毎夜愛人の処へ馬を馳せていく箇所などあるけれど別に月の光等には頼っていない。

"As they stepped on to the door-stones, and halted to take a last look at the moon— or, more correctly, at each other by the light—." (*Wuthering Heights* Chapter XXXIV)

Charlotte は，丘の上に流れる雲を，夜空に輝く無数の星を，そして穏やかな月の光は彼女達の孤独を慰さめて呉れるものとしてこよなく愛したものの如くである。幾度か現われてくる月影，それは彼の女の月への愛着の強さを思わせるようである。では彼女の愛した月の描写をその物語の筋書に合わせながら拾ってみたいと思う。話のクライマックスになるような事件の場合，主人公 Jane は夕方から一人で出かけることになっている。

例えば家庭教師の Jane は Thornfield 家では Adéle の家庭教師のしごとには慣れてきたが，別に事件もない単調な生活にはいささかうんざりしたある冬のある日，家政婦の Mrs. Fairfax に請われるまま手紙を出しに出かける。冬の午後の散歩は快いものだろうと外出用意をして Hay 迄2哩の道を歩いて出かけることにした。その途中の描写が実に美しい。

"The ground was hard, the air was still, my road was lonely: I walked fast till I got warm, and then I walked slowly to enjoy...." (*Jane Eyre* Chapter XII)

人も通らぬ道をある時は速くある時はゆっくりと気儘に歩いている。

"the charm of the hour lay in its approaching dimness, in the low-gliding and pale-beaming sun." (ibid)

Charlotte 特有の合成語が出ている。'low-gliding'；'pale-beaming' など。

"I was a mile from Thornfield, in a lane noted for wild roses in summer, for, nuts and blackberries in autumn, and even now possessing a few coral treasures in hips and haws, but whose best winter delight lay in its utter solitude and leafless repose. ……Far and wide, on each side, there were only fields. This lane inclined uphill all the way to Hay." (ibid)

荒涼たる何一つない原ばかりの冬の自然は余程彼女には気に入りのものだったのであろう。Hay まではずっと登りつづけの坂道，彼女はその途中に腰を下ろして Thorn-

field を見下ろす。

> "I lingered till the sun went down amongst the trees, and sank crimson and clear behind them. I then turned eastward." (ibid)

日が真赤に西に沈んでいく，それから東に眼をむける。

> "On the hill-top above me set the rising moon: pale yet as a cloud, but brightening momentarily, she looked over Hay, which……"

丘の上に淡い月が昇って来る。始めて顔を出す月，その月は今から行こうとする Hay を見下しているといい，そしてその Hay を描写するあたり心憎いまでの筆の運びである。

やがて思いもかけぬ荒々しい物音が静寂を破る。蹄の音。これがこの物語に始めて顔を表わす Thornfield の持ち主 Rochester の出現ということになるので，何事もなかったら通り過ぎる筈の馬が突然氷に足を滑らして倒れ，乗っていた紳士は放り出されてしまう。入念に仕組まれた plot では Jane は幾度か Thornfieid Hall の持ち主 Rochester のことを家政婦からきかされているが不在の主人の顔を見たこともなく今迄は只好奇心だけが大きく胸に拡っていた。非常に痛がってなす術もない主人を助けおこすと，彼女は始めて相手の顔をまともに見ることになる。

> "Something of daylight still lingered, and the moon was waxing bright: I could see him plainly. His figure was enveloped in a riding cloak, fur collared and steel clasped; its details were not apparent, but I traced the general points of middle height and considerable breadth of chest. He had a dark face, with stern features and a heavy brow. his eyes and gathered eyebrows looked ireful and thwarted just now; he was past youth, but had not reached middle age; perhaps he might be thirty-five."

主人公の描写をするにあたって月の光を借りるとは面白い手法である。さき程姿を見せた月かげはここに又輝く，'was waxing bright' とある。そしてたくましい男性的な Rochester の顔が細々と描かれている。 Jane はこの瞬間から Rochester に心を惹かれているのだが，まだ自分では意識していない。自分はあそこに住んでいるのだと大きな邸宅を指さす。これ又月光に照し出されているのである。

> "You live just below—do you mean at that house with the battlements?,, pointing to Thornfield Hall, on which the moon cast a

hoary gleam, bringing it out distinct and pale from the woods, that, by contrast with the western sky, now seemed one mass of shadow." (ibid)

"the moon cast a hoary gleam."—— これで月が姿を消すのでなくなお続く，相手が自分の雇主人であることも尊敬すべき人，忘れることの出来ぬ人になることも知らず，更に又これからおこる種々の波乱も知らない Jane は，馳せ過ぎて行った馬の後姿を見送ってあたりをもう一度見廻す。空虚な一瞬間。「何かの拍子に又突如としてあの馬が戻って来るようなことはおこらないのだろうか。」と Jane は願望，思考をする。そそり立つ柳の木，そこには月が輝きを加えていた。

"I saw only the hedge and a pollard willow before me, rising up still and striaght to meet the moonbeams:" (ibid)

柔かい月の光が偲ばれる。ぼんやりと考えこんだ彼女はあの無意味な豪荘な家には帰えりたくない。余りにも活気のない家，足重く帰って来てもなお門前に佇み，芝生にたたずみ，やがてゆっくり敷石の道を通る。一時かかっていた雲が切れそこに先程の月が再び現われる。今度は晄々と。もうあたりはすっかり夜になっていた。

"both my eyes and spirit seemed drawn from the gloomy house to that sky expanded before me, a blue sea absolved from taint of cloud: the moon ascending it in solemn march, her orb seeming to look up as she left the hill-tops, from behind which she had come, far and farther below her, and aspired to the zenith, mid-night-dark in its fathomless depth and measureless distance; and for those trembling stars that followed her course, they made my heart tremble, my veins glow when I viewed them. Little things recall us to earth: the clock struck in the hall; that sufficed. I turned from moon and stars, opened a side door, and went in." (ibid)

月や星を見ていると心が躍ったと書いてある。Charlotte 自身夜空に一人，これらを見てどのようにか歓喜したのであろうと想像出来る。そしてこの淋しさの最中に心躍ったのは何故か。帰えりたくもないと思った憂鬱な家，豪華な邸宅には既に先程の主人が彼女の到着を待っていることを暗示している。月の光と彼女の心の動き，面白い結合のさせ方だと思う。星という従者を従えて荘厳な迄に輝き亘る月——ここに

Jane の運命も拓けて来る。月と共に進展した Jane と Rochester との出逢いの場はこれで終る。思うに月影に始り月影に終った一つの事件であった。その都度月に対する形容の言葉は事細やかに変化を与えられている。

① the rising moon, pale yet as a cloud, but brightening momentarily, ……
② the moon was waxing bright; ……
③ on which the moon cast a hoary gleam, bringing it out distinct and pale from the woods, that seemed one mass of shadow ……
④ sky expanded before me, the moon ascending it in solemn march, her orb seeming to look up as she left the hill-tops, ……

Rochester を知った Jane はますます彼に心ひかれていくが彼にその念いを知らせる術もなく，又知らせるべきでもなく，主人がやがて結婚するであろうと思われる美ぼうの Ingram 嬢の為に心悩しつつ人をさけて orchard にゆく。素晴しい真夏の太陽の輝き亘る頃である。 Thornfield は緑に掩はれて美しく森も生垣も深い葉の繁りに夏の香りがする。苺摘みに疲れた Jane の生徒 Adéle は早く床についてしまい，彼女は一人庭へと抜け出したわけである。彼女が一人で部屋を抜け出す時は必らず何かおこることになっている。彼女はその orchard の中に Rochester 氏を意識する。早く逃げ出さねばと彼女はあせるが，彼はそれに気付かぬかのように花の香をかぎつつ丹念に見入ってゆっくり歩いている。

> "I meditated. As I crossed his shadow, thrown long over the garden by the moon, not yet risen high, he said quietly, ……"
> (Chapter XXIII)

月はまだ高く昇ってはいない。だがその月に影を落している Rochester は，振りかえって Jane を見ることなしに「Jane 来てごらん」と声をかける。

> "Turn back: on so lovely a night it is a shame to sit in the house; and surely no one can wish to go to bed while sunset is thus meeting with moonrise." (ibid)

「こんな美しい夏の晩，家に入ると云うの？」 Rochester は訊ねる。 'sunset is meeting with moonrise' とあるからには作者は余程西空に陽が傾むいて東に月が出る頃というのが好きらしい。

とにかく素晴しい場面が始るところである。趣を増す為には是が非でも月が必要なのであろう。

> "I did not like to walk at this hour alone with Mr. Rochester in the shadowy orchard." (ibid)

とあり，まだまだ月の光は淡いらしい。

> "Come! we'll talk over the voyage and the parting quietly half an hour or so, while the stars enter into their shining life up in heaven yonder. Here is the chestnut tree; here is the bench at its old roots. come, we will sit there in peace to-night……"
> (ibid)

ここでは月は出されていない。併し恋人と共にいる心の平和はあたりの夜の情景にうまく一致して現わされている。Brontë は月と共に星も好きなようである。月のある情景に星も一緒に描かれてあることが屢々ある。Heath の丘では星，月を好んで眺めたのであろう。がやがて彼女の心の平和はかき乱される，Rochester がさんざん彼女をいらいらさせるからである。そこに突然風が吹いてきて夜の光景は荒れる。Jane の心も荒れる。が，老練な Rochester は中々手綱をゆるめない。いい加減Jane をじらしたあげく，自分が本当に結婚したいのは Jane 一人であると今まで自分の中に大事に育んで来た本心を告白する。が，突然の申し出に Jane はとうてい彼の言葉を信じることが出来ない。「本当でしようか？」彼女はどうしても信じようとしない。「ではお顔を見せて下さい」彼女は懇願する。

> "Mr. Rochester, let me look at your face; turn to the moonlight."
> "Why?"
> "Because I want to read your countenance—turn!"
> "There!……Read on. Only make haste, for I suffer." (ibid)

恋故に苦悩する Rochester の様子が月あかりにありありと想像される。これで月の光に照らされた Rochester の顔は二度目となる。始めは見知らぬ男性としてつくづくと眺め，今度は愛を告白されたあと，その真偽を確めるために，わざわざ月の方に顔を向けさせる。やがて Jane は御主人様と心ひそかに思い尊敬していたこの Rochester が自分を愛してくれたのはうそでないことを確めると結婚することを約束する。そして二人だけの静かな時が流れる。

The clock was on the stroke of twelve."

夜の十二時だとある。

求婚，承諾，結婚の準備と Jane には慌しい日が過ぎてゆく。トランクも詰めこまれた。明日の結婚式を待つばかりである。Jane は又風に誘われるように夜の orchard へと一人出かけてゆく。さて何ごとがおこるのだろうか。風が吹き荒んでいる。風の唸りは彼女の心の不安を示す。が雨は降っていない。木々も左右に揺れている。その六月の夕空には青空も見えない，処が

"The wind roared high in the great trees which embowered the gates; but the road as far as I could see, to the right hand and the left, was all still and solitary: save for the shadows of cloud crossing it at intervals as the moon looked out, it was but a long pale line, unvaried by one moving speck." (Chapter XXVII)

雲が割れて月が顔を出す。彼女は不在の御主人様のことを思い淋しさに堪えかねて不覚にも涙をこぼす。

"I lingered: the moon shut herself wholly within her chamber and drew close her curtain of dense cloud: the night grew dark; rain came driving fast on the gale." (ibid)

彼女の心に同情してか月も顔を隠す，真暗な夜となり，雨まじりの風が吹き荒さむ，御主人様をお迎えに行こうと濡れるのも構わず heath の丘を出かけてゆく。思いもかけず早く御主人様に出逢う。馬上の人は近づいてくる。

"He saw me; for the moon had opened a blue field in the sky, and rode in it watery bright: he took his hat off, and waved it round his head. I now ran to meet him." (ibid)

ここで再び雲間に月が見える，海のような澄み切った夜の空を月がすすんでゆく，Rochester は彼女を認め嬉しさに帽子をふり廻す。彼女もとんでゆく，心の晴々した時は月も必らず顔を現わしてくれる。雲に捲われ，また一寸雲切れになって顔を出

し，またもや雲にとじこめられて隠れていく月が今は晴れ亘った大空を静かに渡りゆく。不安と喜びとの交錯する Jane の心中の象徴となっているのである。海とも見まがう夜空の青さ，その青さは月がひらいてくれたのだとある。輝く月のあかるさが偲ばれる。

Rochester を待ちに待っていた Jane は唯主人の不在がたまらなく淋しかっただけではない。実はその前夜あった訳の分らぬ理解も出来ぬ恐怖に満ちた出来事を早く彼に話してその説明を求め落着きたかったのである。しっかりと自分一人の胸に大事を秘めて耐えぬくことの出来た賢明な彼女は主人が落着く迄話すのを差し控えるが，やがて促がされるままに話を始める。先づ始め前夜見た夢とも現実とも分らぬものの出現を話す前，うとうとと前夜に眠っていた間に見た夢の話から始める。

> "I dreamed another dream, sir: that Thornfield Hall was a dreary ruin, the retreat of bats and owls. I wandered, on a moonlight night, through the grass-grown enclosure within:…… (ibid)

夢の中に現れるものさえ月夜の出来ごとである。この月夜は彼女に少しも静かな喜びを与えるものではないが，夢の中でさえ月夜にさまよい出た Jane はそこで Rochester に逢う，この夢の中に出る Rochester は遠くへ行ってしまう捉え難い人ではあるが……。

次にいよいよ本論として昨夜の夢のような幻のような女の出現を Rochester に話す。結婚式のベールは真ッ二つに裂かれてそこに証拠として残っていたこと，彼女の顔を真夜中のぞきこんだ裂けんばかりの口をした恐しい顔のことなど思い浮べるままに詳しく話すが，Rochester は一向に明確な解答をしてくれない。幻覚ではないにしろ，それは雇人の Grace Poole でもありうるということに結局はなってしまって無理矢理に納得させられる。

夜も更けてしまっている。Rochester を迎えに出かけた時の風は何処えやら跡方もなく収まって彼がカーテンをあければ平和な夜空である。

> "Janet, Don't you hear to what soft whispers the wind has fallen? and there is no more beating of rain against the window-panes: look here" (he lifted up the curtain)— "it is a lovely night!"
>
> It was. Half heaven was pure and stainless. The clouds, now trooping before the wind which had shifted to the west, were filing off eastward in long, silvered columns, The moon shone peacefully. ……"The night is serene, sir: and so am I." (ibid)

夜空には一片の雲もなく月はおだやかに輝いていた。そして今や彼女の心もおだや

かだった。閑かに澄んで落ち着いていた。

Jane と Rochester の結婚，それは思いもがけないことによってかき乱されて目茶苦茶になってしまった。 Rochester には既に結婚した妻のいた事を知らされたからである。それはひどい結婚であったと隠しに隠したその狂乱の妻について Rochester は話し始める。

> "One night I had been awakened by her yells—since the medical men had pronounced her mad, she had, of course, been shut up. It was fiery West Indian night; one of the description that frequently precede the hurricanes of those climates. Being unable to sleep in bed, I got up and opened the window. The air was like sulphur-streams — I could find no refreshment anywhere. Mosquitoes came buzzing in and hummed sullenly round the room, the sea, which I could hear from thence, rumbled dull like an earthquake; black clouds were casting up over it; the moon was setting in the waves, broad and red, like a hot cannon-ball — she threw her last bloody glance over a world quivering with the ferment of tempest." (Chapter XXVII)

病気で気狂いになった妻—Rochester がだまされて結婚した妻は既に気が変になっていたが，—それを苦心して連れかえる船中の話，妻の恐しい唸り声に彼は目が覚める。今まで描かれた月は総べて平和のシンボルのような月であったのに引きかえ，この月だけはその趣を全然異にしている。そのときの月は太砲のたまのような赤い球であったと書いてある。狂気の妻を連想させるにふさわしく月も又隠やかな光は投げて呉れなかった。凄味を帯びた月光。—「この引用は複雑で強い視覚的な効果を持っている」とは大山敏子氏の言である。 "like a cannon ball" とは彼女独特の比喩の仕方である。

"the moon was setting in the waves, broad and red, like a hot cannon-ball." それは今打ち出したばかりのあつい太砲のたまであった。

自分は結婚出来ない。 Rochester は重婚をしようとしているのである。如何にそれが狂気の妻であろと，又その為に如何に Rochester が苦悩しようと，純真な助けとなる女性にめぐり合うために Rochester が何程長い間探索してやっとのことで摑み得た幸福であろうと，又 Jane 自身が何程 Rochester に心を惹かれて居ろうと，彼

女は断固として，この彼の切なる願も斥けなければならない。彼女も亦苦しみ乍らそれでもなお固い決心のもとにその夜自分の部屋に退くと床につく。そして又もや彼女の夢に現われのは……

> "I dreamt I lay in the red-room at Gateshead; that the night was dark, and my mind impressed with strange fears. The light that long ago had struck me into syncope, recalled in this vision, seemed glidingly to mount the wall, and tremblingly to pause in the centre of the obscured ceiling. I lifted up my head to look; the roof resolved to clouds, high and dim; the gleam was such as the moon imparts to vapours she is about to sever. I watched her come — watched with the strangest anticipation; as though some word of doom were to be written on her disc. She broke forth as never moon yet burst from cloud; a hand first penetrated the sable fold and waved them away; then, not a moon, but a white human form shone in the azure, inclining a glorious brow earthward. It gazed on me. It spoke to my spirit: immeasurably distant was the tone, yet so near, it whispered in my heart;
> "My daughter……" (ibid)

彼女の決心を助けるものは月というより，空にあらはれた彼女の母の霊であった。精神的なものの総べて一生命の根源ともなるべき愛，今や確実に摑んだ愛情をふりきるためには，幾倍もの勇気のいることであった。それでもなを彼女はそれを断行しようとする。信仰的な迄の愛情ではあるが Jane は更にそれにもまさる信仰と云うものを持っていた。正しいと信ずることのためには断固として何物をも辞せぬ強い態度，自分自身に甘えようとしない強さ，人間的な弱さに抵抗しようとする毅然たる態度が彼女のものであった。こうした場合，今までの只静かに輝く月の光だけでは足りなかったのであろう。月は母の姿ともなって彼女を勇気づけ新たな力となってくれる。けだし月は Charlotte には慰さめを与えるだけでなく母を早くなくした彼女にはいざという時には，母となって力を与えてくれていたものであろう。

> "not a moon, but a white human form shone inclining a glourious brow earthaward. It whispered in my heart."

決断した彼女は夜中の中に真暗やみの中を僅かのものを纏めて愛する Rochester のもとを去っていく。彼に重婚の罪を犯させてはならない。流石ここでは Charlotte の好む月の光も影を落してくれぬ。ここで月に出られたら困るのであろう。彼女は見

付けられぬ中にうまく逃げ出さねばならぬのであるから。

以上のような月の描写を追って物語の筋と Jane の心の動きを追っていく時，私は奇妙なことに気づいた。Charlotte の好むのは，日が西に傾いてそして東を見ると月が出ていたとか，日の光と月の光が交り合っている時とか，常に月は夕暮早く姿を現わしているようである。そしてその月の描写が続き「夜の十二時であった」等と書いてある。夕空に早く顔を出す新月はほんのりと空に淡くすぐに消えてしまう。恋人の顔をありありと照らすまひるのように明るい月はどうしても満月頃であるが，そしてこの頃の月なら夜の十二時頃迄も輝いているが，月の出はずっと遅くなる。「夕空に日の沈むと同時に」とか，「日の光と月の光が一緒になって」と書いてあるがそのように早くは出ない。せいぜい満月より五，六日早い月が西に日の傾く頃ポッカリと空に薄く浮んでいるが，これは夜中までは空に居ないし，Charlotte の描写に出て来る程明かるい光ではない。どうも矛盾している。西に日没，東に雲のようなほんのりした月が浮び，やがて恋人の顔を照し，別れてもなお心惜しくて佇ずむ時夜更けて，あかあかと丘の下の家を照らし，等は少し無理がある。夜の十二時だった，などとある場合はどうも解せない。

思うに Charlotte は月と心の動きをねらうの余り，技巧に過ぎたように思われる。*"Jane Eyre"* が fiction であるならばその巧な月の描写も亦一つの fiction であるということになる。だが静かな光をたたえた月は，そんな論をきけば一人笑っていることであろう。Heath の丘で Charlotte が好んで眺め，慰を求め，勇気づけられその中へ母をさえ見た月は，夜中の月であろうと夕方の月であろうと問題はないのである。あらゆる phase の月が一つの事件の背景となっていることを fiction は少しも妨げない。それでいいのだと私は思う。特に Charlotte の場合それが彼女の magic art を形成する要作因となっているので，客観世界の事実との多少の齟齬（くいちがい）があっても，それを殊更に問題とする方が野暮で，われわれは fiction を fiction としてその美しさを細大洩らさず鑑賞すべきではなかろうか。私のこの論文は，その線に沿うての一つの小さな労作であることをご諒解願いたいのであります。

そればかりではない。この私の小論文はヒロイン Jane のヒロー Rochester に対する清烈なる愛情（空愛とも敬愛とも云う）を月 moon の varying scenes でもって symbolize することに依って非常なる文学上の効果 Literary effect を materialize しているという角度からこれを見る時，まんざら無意味な労作ではあるまいと私は信じるのであります。

参　考　書

E. C. Gaskell　　*The Life of Charlotte Bronte*

阿　部　知　二　　ブロンテ姉妹
大　山　敏　子　　*Jane Eyre* の英語
和知誠之助　　英国の小説法
Text
Charlotte Brontë　　*Jane Eyre*
(Everyman's Library)